

# 『経験は嘘をつかない』

宮城県フェンシング協会副会長 千田 健一

世界中を恐怖と混乱の渦に巻き込み、未だ終息の気配さえない新型コロナウイルス騒動。その余波はスポーツ界にも甚大な影響を及ぼし、汗と涙の結晶である貴重な発表の舞台を高校生から奪い取ってしまいました。高校生の皆さんにとっては、この状況を仕方がないと受け入れることは決してできるはずもなく、「私の3年間を返して」「これまでの努力はなんだったの」とやり場のない思いで一杯でしょう。また、顧問や監督の方々にとっても到底納得できるものではなく、「選手たちにどう説明すればいいのか」と頭を抱えていることと思います。

私は小学生の時にフェンシング競技と出会い、オリンピック選手を目標に必死に努力を重ねました。そして、やっとの思いで辿り着いたモスクワオリンピック代表。しかし、集大成の場であった夢の舞台が、ボイコットにより幻となって消え去りました。自分が試合で負けたのであれば納得して夢を諦めることができますが、勝負もさせてもらえませんでした。現実を受け入れることができず自暴自棄になり、フェンシングに対する情熱も冷めてきていました。そんな私が高校の教員となり部活動の指導をしていく中で、真摯に競技に取り組む教え子たちからスポーツの価値と私にしかできないことに気付かせてもらいました。それ以後、モスクワオリンピックの苦い経験と教え子たちからの無言のメッセージが、自身では叶わなかったオリンピック出場の夢を教え子が叶えてくれると信じ、28年間頑張れた原動力だったのかもしれない。

今回選手と指導者の両方を経験したからこそ、皆さんの夢の舞台である県総体やインターハイの中止は残念であり悔しくてなりません。しかし、高校生アスリートの皆さん、スポーツの価値とは、部活動の意義とは何でしょうか。ただ単に競技者を育成するだけでなく同時に人間形成の大切な機会であり場でもあります。協同精神や人との関わり方や他人を思いやる心を育てる場であり、部活動を通じて多くの場面を経験し技術を磨くと同時に自分自身を鍛える場でもあるはずです。今までの努力は決して無駄にはなりません。これまで、指導者からの叱責に落ち込んだこと、大会で良い結果が得られず心がくじけそうになったこと、心が折れそうになっても諦めずに努力を続けたこと、それら多くの経験を経てたくさんさんの困難を乗り越え成長してきたはずです。だからこそ、社会人としてこれからの人生を歩んでいく時、スポーツを通じて学んだことや部活動での経験という財産が必ずや生きてくるでしょうし、是非生かしてほしいと思うのです。決して高校3年間の競技生活で培った様々な経験は嘘をつきません。決して無駄な3年間であるはずがありません。努力を重ねてきた3年間に胸を張り自信をもって、これからの人生、様々な困難に対しても笑顔で自分に大丈夫と言い聞かせ、前向きに取り組んでいって欲しいと願わずにはられません。